観光の将来のため取り組むべきこと

昨年 12 月 21 日、予想されていたとはいえ、少なからずショッキングなニュースを目にすることになった。一つは、北海道開発予算の7年連続減少を報じる 2007 年度予算のニュース。もう一つは、おおよそ半世紀後、55 年のわが国人口を 9,000 万人割れと試算した将来人口推計のニュースだ。「予算」と「人口」という経済社会の根幹をなす要素の変化は、十勝観光にも多大な影響を及ぼすことになろう。

昨年の本紙連載（8 月 17 日）でも述べたが、十勝の観光は「道内客中心」「日帰り客中心」という特徴があるが、「予算」と「人口」の減少は、道内客中心の十勝観光に大きなダメージを与える危険性をはらんでいる。

例えば、北海道開発予算の削減は、道民の所得を通じて、観光への家計支出を引き下げる可能性がある。また、マーケットを道内客に依存すれば、人口減少による観光客減少に歯止めを掛けることは難しい。つまり、道民の懐具合が寂しくなる上に地域の人口が減少していけば、道内客に依存する十勝観光も真綿で首を絞められるような状況に陥ることになろう。

回避するためには、昨年の連載でも提言したが、食や体験観光などの戦略でマーケットを押し広げ、全国のシニア世代やファミリー客にリピーター層を増やすことが重要だ。国内人口の減少に拍車が掛かるならば、海外マーケットを取り込む戦略も必要だろう。

そのためには、対外的なイメージ戦略だけでなく、もう一つ重要な要素がある。それは「地域住民のためのまちづくり」を貫くことだ。十勝観光の魅力は自然景観を見せる秘境観光ではなく、雄大な自然を生活の中に取り込み、豊かな食を満喫できる生活観光にあるのではないか。住民がいる風景、それこそがリピーターの求めるものだ。

その点、沖縄の戦略はしたたかだ。沖縄の食、音楽、おおらかな人柄や暮らしぶりを、「癒し」という時代の求めるキーワードに結び付けて売り込んでいる。そして、それが観光客を呼び、年間2,000 人の転入増加にもつながっている。

十勝の場合、沖縄に匹敵する魅力があり、本物の観光地として未来も生き抜いていく可能性がある。ただ、十勝の中心都市である帯広ですら、まちの様子は寂しさを増している。まずは住民が歩くまち、地元の人が参加するイベントを育てていく必要がある。

幸い十勝には、北の屋台の成功や、ばんえい競馬廃止の危機を乗り越えた実績がある。行政が空き店舗対策を講じて地元住民も訪れるレストランや地産品の店を中心街に整備、地元住民が足しげく通うばんえい競馬を実現したい。世界的イベントである世界ラリー選手権（WRC）ラリージャパンも、リエゾン区間（沿道）の応援を含めて住民が手ぶらで楽しむ「お祭り」に、地元主導で盛り上げられないだろうか。

いまや観光客がひきつけられるのは、非日常的な大規模リゾートではない。住民の楽しげな様子に引き込まれるように観光客が集まってくるということを忘れてはならないだろう。